絵図・浮世絵に見る横浜開港

2022.10.06　森　彩子

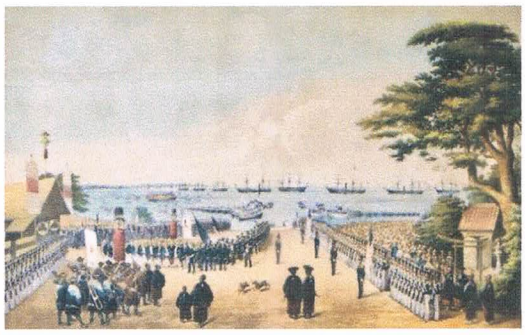
横浜が開港したのは今から163年前の安政6年(1859)6月2日である。

日本の開国は、二段構えで行われた。

① 1854年(嘉永7)、開港に先立つ5年前
「日米和親条約」調印

② 1858年(安政5)、日米修好通商条約「安政の五カ国条約」(米蘭露英仏)調印

前年に調印されたこの日米修好通商条約(安政5カ国条約)によって横浜は開港することになる。
そして、横浜は幕末から明治の激動の時代を生きた人々の舞台ともなった。



「ペリー提督横浜上陸之図」(横浜開港資料館蔵)

それまで、東海道の道筋から外れた小さな寒村に過ぎなかった横浜は、貿易の開始と共に多くの外国人が移り住み、各国の商館やホテルが立ち並ぶ国際都市となり、日本近代化の窓口として大きく変貌を遂げていくことになる。

横浜の開港を語る時、様々なテーマが考えられるが、今日は「開港場を中心とした横浜という町がどのようにして形作られていったのか」に焦点を当てて、今に残る様々な絵図や浮世絵を見ながら、横浜開港の様子をたどっていきたい。

1. 横浜開港に至るまで（開港以前の横浜）

①　開港地はなぜ横浜なのか

開港が決まった港の内、神奈川については、アメリカ総領事のハリスやイギリスのオールコックが、東海道筋の神奈川宿を開くことを要求した。
しかし、外国奉行・岩瀬忠震らは異なる決定を下す。
それは、神奈川宿ではなく、東海道から少し離れた横浜村を開港場にすることだった。
その理由：・「横浜も神奈川の範疇である」
・「神奈川宿沖合の水深は浅く大型船の停泊には不向き、横浜の沖合は水深が深い」
しかし、その本音は、「東海道は江戸まで一本道ということもあり、東海道での外国人と日本人の接触によるトラブルを避けるため」であった。
ところが、諸外国の外交団はそれを認めず、神奈川宿には領事館が相次いで開かれた。

③　横浜村の原風景

幕府が開港場に想定した「横浜村」はどのようなところだったのだろうか。
江戸時代の初め頃まで、現在の中区と南区の一部は、大岡川が流れ込む入江・入海だった。
東京湾と入海を区分するように左から右に突き出た砂浜(砂洲)が「横浜」である。それは地名の由来ともなった。
その先端部には、弁天社と思われる小さな祠があり、村の集落は現在の元町付近に百軒ほど集まった寒村だったと言われる。

吉田新田開発前図
『川のまち・横浜』より

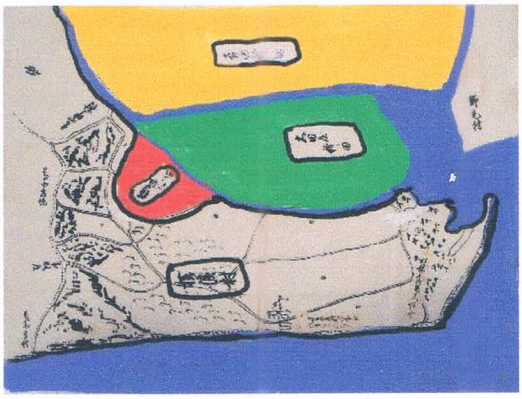
③　新田開発

この入海の埋め立てが始まったのは1656年(明暦2)のこと、横浜開港の200年前である。新田開発とは、土地を開拓して新たな農地を作ること。それによって領地の石高（生産性）を上げていくことが江戸時代からの政策であった。

・吉田新田…江戸・日本橋の材木商・吉田勘兵衛が
(図黄色部分)　幕府から許可をうけて工事を開始、
1667年（寛文7）に埋め立て完了。

・横浜新田…文化年間(1804-1817)、現在の中華街に
(図赤色部分)　当たる地域が完成

・太田屋新田…嘉永 3 年(1850)～安政 3 年(1856)、
(図緑色部分)　現在の横浜スタジアム付近が完成



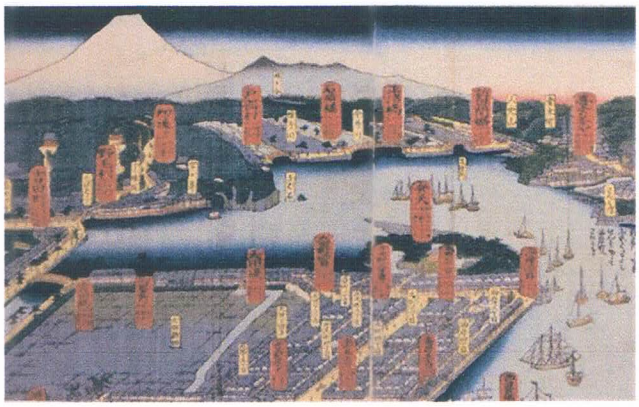
横浜村絵図　(軽部氏所蔵の図を加工)

こうして、江戸末期には入海の殆どは陸地となった。

④　よこはま道

1859年3月、ハリス(元々、横浜に開港場を設けることに反対していた)と、外国奉行の会見席上、神奈川宿から遠く離れた横浜村への交通の便の悪さを指摘された。と言うのも、開港場に決まった横浜村は交通の便が悪く、神奈川宿からの船便、または、保土谷宿から井土ヶ谷を迂回するしかなかった。
そこで、幕府は神奈川宿と横浜村を短距離で結ぶ道を急遽作ることにしたのである。
そして、開港を3か月後に控えた安政6年3月に急ピッチで突貫工事を開始した。
東海道と横浜を陸路でつなぐため、三つの入り江に橋を架け、野毛山を削り切通しを作り

吉田橋を経て開港場に至る４ｋｍの道を建設した。この道は「よこはま道」と呼ばれている。



「横浜道中見物双六」よこはま道部分(1860)

横浜開港資料館蔵

このよこはま道にはエピソードがある。
2008 年、旧家から発見された古文書(保土谷宿の名主で横浜の町役人「惣年寄」軽部清兵衛が開港半年後の安政 6 年 12 月付で奉行に宛てた文書)には、当時の工事の丸投げの実態が書かれている。

工事を丸投げしてしまう構造は 150 年以上前も今とほとんど変わらないと言うわけである。

このよこはま道によって、横浜村は首都の江戸と一本の道で結ばれた。開港後、よこはま道は頻繁に外国人が利用する道となったが、生麦事件など外国人をめぐる不幸な事件も起きている。

(右は野毛切通しから開港場を望む人々が描かれた浮世絵)　⇒

「野毛村切通シヨリ」(1860)

◆横浜が開港場として選ばれた要因
(開港場はなぜ横浜なのか)

開港に先立つ 5 年前の 1854 年、日米和親条約が調印されたのが横浜だったことなど、様々な理由が考えられるが、江戸周辺に位置し、当時の主要幹線である東海道から少し離れた地点に位置するという地理的な条件を考えると、次の 3 点が開港の前提と考えられる。

① 江戸時代の初めから**新田開発によって陸地化された**ことが、開港場建設を可能にした
② **よこはま道の建設**によって開港場と江戸とを結ぶ陸路が出来た
③ 神奈川湊という東京湾の中でも**有数の商品の集積地があった**こと
つまり、開港場を直接支える一定の経済圏がすでに存在していたこと

2. 開港後の都市計画

① 外国人居留地と日本人町と関門

・開港場は、現在の日本大通りの東側を外国人居留地、西側を日本人町とした。
神奈川奉行所の建物や遊郭、外国人のための住居などを作り、日本人の商人を誘致して建物を作らせるなど、市街地が出来上がっていく。つまり、なし崩し的に横浜が開港場となっていった。そして、神川宿に置かれた各国の領事館も文久3年(1863)にはすべて撤去された。

開港場の図

・1864年（元治元年）の横浜の人口は、イギリス領事の調査によれば、日本人12,000人。居留地外国人の他、外国商館で働く中国人など多数来日していた。
様々な業種の人々が住み、輸出入も始まり、横浜は世界の人々と交流する場所になっていく。

開港直後から攘夷派の浪士たちが横浜に入り、市街地で外国人の殺傷事件が相次ぐ。そこで、外国人を攘夷派の浪士から守るため、開港場の出入り口に関門を設けた。(安政6年1859)。その内側が「関内」、外側が「関外」とよばれたことはよく知られている。

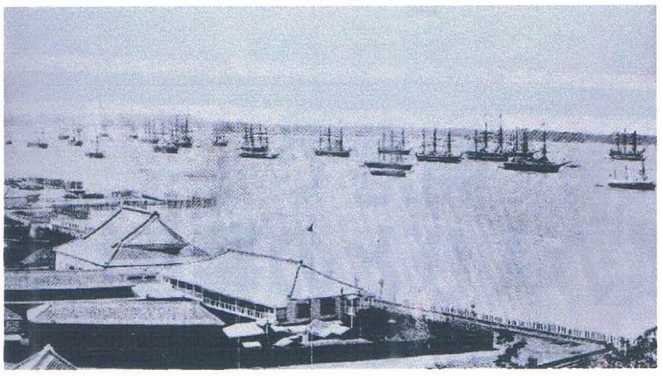
② 遊郭

関内の太田屋新田(現在の横浜公園)に遊郭を作ることが計画され、安政6年(1859)に開業。開港場を横浜にすることに反対する外国人をひきつけるため、また、オランダ公使から開設の要請があったことによるとされている。

③ 都市改造

明治3年、外国人居留地と日本人市街地との境界に日本大通りが完成した。実は防火帯として作られたのである。

慶応2年(1866)に通称「豚屋火事」と呼ばれる火事があり、豚肉料理屋の鉄五郎宅から発生。その火は遊郭を焼き尽くし関内中央部から扇状に拡がって開港場の半分程が消失した。
その火事によって、一気に都市改造が進むこととなる。


幕末の横浜市街写真
(F・ベアト撮影パノラマ写真の一部)

①遊郭を移転させ、跡地を公園にする　　②日本大通りを作る
③　建物の耐火性を高め、下水を完備　　④　山手に公園を作る

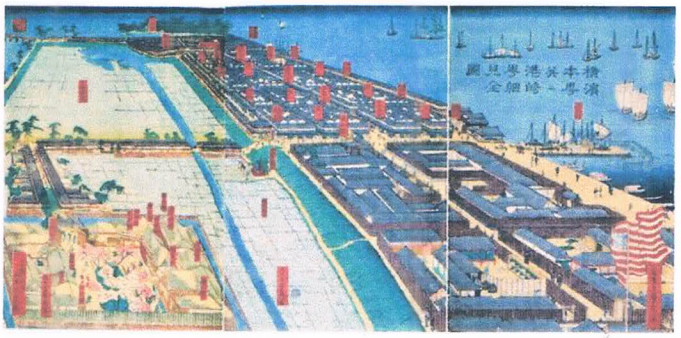
などが決められ、日本人町と外国人居留地の境目に、建物を密集させずに道路を広めにとった日本初の近代道路が出来上がった。

＊明治時代、様々な分野でお雇い外国人が活躍する。都市計画やインフラ整備についても同様だった。その内の１人がリチャード.H. ブラントン(英国人)である。
「灯台の父」と言われた彼は、吉田橋鉄橋の改造工事、下水道や街路の整備、横浜公園の造園など横浜の都市整備に指導力を発揮した。
「ブラントンなしには横浜の街造りは語れない」と言われている。

3. 開港後の横浜風景

＊　横浜浮世絵

安政６年(1859) に国際港として開港した横浜は、貿易の開始と共に多くの外国人が移り住み、各国の商館やホテルが建ち、居留地を含めた開港場全体が一つの名所となる。
人々の旺盛な好奇心に応えるべく、江戸の多数の版元が横浜の新しい街並みや外国人の風俗などを描いた浮世絵を出版。それらを総称して「横浜浮世絵」という。
作品の数は840を超え、二代広重など浮世絵師の殆どが制作に当たった。その浮世絵師の中でも「五雲亭貞秀」は、北斎・広重亡き後の浮世絵界の第一人者で、生まれたばかりの街並みを様々な角度から鳥瞰図で名所絵風に描き、「都市の肖像画家」と言われた。



「横浜本町并二港埼町細見全図」

神奈川県立歴史博物館図録より

① 町の賑わい

1869 年(明治 2)それまで木の橋であった吉田橋が鉄の橋になった。ブラントンの設計によるトラスト工法で、当時**「カネの橋」**と呼ばれて親しまれ、新しい街並みと共に文明開化のシンボルとして錦絵などに描かれた。(長さ 24m、幅 6m)

「神名川横濱新開港図」(1860 安政 7) ⇒

五雲亭貞秀

② 鉄道開通

明治政府が行った大事業の一つとして鉄道の建設がある。
明治3年(1870)英国人モレルを建設責任者として明治5年(1872)に開通。
(横浜(桜木町)ー新橋(汐留)間を約53分で走る(馬車では4H)。
1日9往復した。
機関車は見物人からは水上の蒸気船に対して「陸蒸気(おかじょうき)」と呼ばれた

「東京汐留鉄道御開業祭礼図」(1872)

鉄道開通式には、明治天皇も参列し、楽隊の演奏や、横浜港停泊中の軍艦の祝砲などがあり外国公使や外国商人らも招かれ、人々は提灯・幟旗で祝い、盛大な式典が挙行された。9両の汽車には明治天皇をはじめ、政府の高官が乗車。その様子は、イラストレイテッド・ロンドン・ニュース(絵入週刊新聞)にも描かれている。
因みに、翌月には横浜の街にガス灯が点灯した。この鉄道開通式典は、文明開化のまち作りが進む、その大きな出発点となった。

③ 外国人の風俗

開港した横浜は好奇心の強い日本人にとって新しい観光地となった。今まで見たことのない外国人はどのような顔なのか、どんな服装なのか。
横浜浮世絵には、こうした人々の欲求に応え外国人の風俗を描いた作品が最も多くみられる。

◆1859年(安政6)の横浜開港から9年後の1868年(慶応4年=明治元年)、明治という時代が始まる。

「横浜休日阿蘭人遊行」(1861)

主な参考文献:

- 横浜絵地図　有隣堂(1989)
- 『開国史話』　加藤祐三　かなしん150選書(2008)
- 『横浜浮世絵』　神奈川県立歴史博物館(2009)
- 「神奈川開港関係書類」　資料編纂所
- 「開港のひろば　138」横浜開港資料館(2017)
- 『横浜ものがたり』横浜市歴史博物館・横浜開港資料館 (2004)
- 『横浜』神奈川新聞社(2010)